

碩心会 常任理事会ひらかる

二月二十六日(旧六代御前社務所に於て行なわれ、左記議題につき討議されました。

- 1・温習会指導者吟詠の件
- 2・碩心会会員名簿作成の件
- 3・指導者序列の件
- 4・皆伝会開催の件
- 5・その他

花見

堀内・D 五十嵐瑠璃子

「ハナ」と聞いて、皆さんは何の花を思われるだろうか。自分の思い入れの花を持った人を除いては、大方の人が「桜の花」を思われるにちがいない。「花は桜木、人は武士」ともいわれるように、日本の国花にも定められた桜は、多くの詩歌にも詠まれている。

毎年春ともなれば、文字通り華やかに咲く桜の花は、ハナの中のハナであり、その原義は、穀霊(サ)の宿る座(クラ)という理解に由来すると考えられる。

日本の古い信仰では、花については、育て

る事、いい花を咲かす事、無駄に散らさない事、これが非常に大切な事であった。春の花が早く散れば田の実りが悪い兆と見、人の身に災が来ないようにと、なるべく花を散らすまいと祈ったのが、鎮花祭の起りで、奈良朝以前からあったと思われる。

「花見」も、本来は稲の花の象徴である梅の花が散らぬようにと念じた農耕神事であり、生活に密着した信仰そのものであった。部落をあげて、花のある山に出かける風習は、比較的近い時代まで各地に残っていた。

しかし、そうした意味をもつ「花見」も、事のありようからいって、遊興と紙一重であったし、特に都市の貴族にとり込まれた時、詩賦と、音楽に、酒肴とが不可分の「置酒興楽」であった。

平安時代に入り、内裏の紫宸殿前庭の梅が、桜に植えかえられ、山林自生の花を各所に求めて、観桜の宴が毎年もたれ、花の名所も生まれてきたようである。又自邸に「花亭」を設ける貴族も現われた。

このような、山林自生の花であれ、邸内に植えられた花であれ、これを愛でる花宴の盛行の中から、文人達の競いあう漢詩や、和歌

集が生まれたのである。

順調な、時の推移に安らぎを覚え、豊かな実りを期待し、満開の花に華やぎ、散る花に無情を感じる。花は日本人の生活に、古代より現代に到るまで、深いかかわりを持っているのである。

(入会)

749 北原芳人 葉山町堀内二一〇〇一―一六

(下山口) 〇四六八―七五―七四―三

750 井上哲男 葉山町長柄七六八―一六

(長柄) 〇四六八―七五―五三―八

(退会)

193 松崎艶風(一色A) 260 草柳利風(逗子A)

601 多田秀風(吟秀) 703 大場嘉江(堀内D)

桜前線



気象庁が桜の開花予想を発表。それによると、今年の桜(ソメイヨシノ)の開花は、ほぼ平年並みで、横浜での開花予想は27日で、平年より二日早い見通しで、開花後一週間後には満開になるといふ。